# 魔族のハーレム

ライラック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔族のハーレム

【Ｎコード】
Ｎ６２２７Ｗ

【作者名】
ライラック

【あらすじ】
俺はある目的の為
色々と方法を模索していた。
だが、今の俺では無理だと判断した。
転生を試みた所、成功。
前世の記憶が残っているというオマケ付き。
だが、俺の性別は女！

しかも魔族！

今こそ野望を夢を！

## とある男の話

真っ白い部屋に真っ白いベッド
見飽きた風景に天井
産まれてから３０年、これが俺の世界

車椅子が無ければ移動する事も出来ない、この身体
原因不明の病が産まれた瞬間から身体を蝕んでいく

俺に出来る事といえば本を読む事や勉強する事
動かずに出来る事だけだ
特に勉学に関しては、かなりした
医者が匙を投げた病に俺は屈する訳にはいかなかったから

ありとあらゆる医学書を読み漁り
時には権威ある医学者に直接会い話を聞いたりした

その後は薬学の勉強をした
製薬会社と協力し薬を作ったが、それは進行を遅らせるだけだった

他にも科学的な面からも考察し電気で神経に信号を送る機械を身体に入れるという案があったが、その手術に俺の身体が耐えれそうになかった

最後に霊的、魔術的な物に手を出した
見えざる力に頼った
その時点で周り諦めていた
俺が自暴自棄になったと思ったのだろう
俺は、それでもこんなくそったれな身体をどうにかしたかった

俺が、この世界で生きるには俺は、あまりにも弱く
俺の夢の実現までには、あまりにも遠く
そして残された時間は限りなく少なかった
自分の身体だ
それくらい分かる
だから俺は１つ賭けに出た
無謀ともいえる賭けだ

魔術書で読んだ転生の術
他の人間からした鼻で笑うだろう
だが俺は他の人間とは違う
魔法陣を床に描いていき自分の血を流す

「ただで死ぬものか！この俺が、ただで死んでやるものか！」

白い部屋が光で溢れていく
世界が光で溢れていく

「俺の野望の為！」

## 世界の理

ーハーレム、それはたった1人の男が数多の美女をはべらす場所である
ハーレム、アラビア語ではハリーム
トルコ語ではハリム
それは聖地
それは禁じられた場
それは男の楽園
日本で言えば江戸時代でいう大奥がハーレムに値すると言えるだろう
かのオスマン帝国の最盛期には１０００人以上の美女が集められた
と言われている
男の夢、そして俺の野望ー

王座、そこには1人の少女に鋭い眼光を向ける王たる1人の男が座っていた

その鋭い視線に怯む事なく黒い瞳で視線を返す少女は腰まで伸びた
自らの美しい黒髪を面倒くさそうにかきあげた
美の女神ですら羨む美しい顔立ち
誰もがすれ違う度に思わず見惚れてしまうスタイル
それが転生した私の姿だった
そう私の転生の術は成功したのだ

「では任せたぞ」

「ふんっ」

王に返事を返さず王の前を後にする
ついでに言えば王と呼ばれている男は私の父親だ
ちなみに見た目は四十前後だが既に千年以上生きている
そう人間ではない

私は違う世界に生を授かったのだ
しかも人間ではなくこの世界でいう魔族という種族
そして性別は女だ

転生の術は自らの記憶を保持したまま生まれ変わるという大ざっぱな術だったが
当たり前のように自分は同じ世界に人間の男として生まれ変わると思っていた私が
まさか別の世界でしかも性別や種族が変わるとは
自分の姿を確認するまでは内心相当焦ったのは私だけの秘密だ

不幸中の幸いとも言うべきか
この身体は人と似た様な姿で頑丈だ
性別は女だが
この見た目なら野望に支障は無い

簡単に、この世界の事を説明してやろう
街並みは中世ヨーロッパの様だが
それなりに科学が発達していて、お粗末だが車も飛行機もあるし勿論、列車も走っている

それに、この世界にも人間が居る
この世界の種族を大きく分けると魔族、人族、獣人族、妖精族、神

族だ
それぞれ多数の国や部族によって細かく分かれてくるが、それは追々
私は魔族の始祖たる一族だ
魔族は途方もなく寿命が長い
私の見た目は人間でいう十七、十八くらいだが転生して既に百五十年程経っている
百五十年もあれば一人称が俺から私にもなったりするのも無理はない
魔族の寿命が長いのは個体差はあるが体内にある魔力の量が多いからだと言われている

その事から分かるように、この世界には魔法がある
魔族は例外なく魔法が使えるし私も取得済みだ
人間は魔力量が少なく魔術書や杖などの媒介が無いと使え無いらしい

魔族に生まれ変わって良かった
この世界は中々に楽しい

バンっと扉を開けて自室入り既に待機していたアリーシア・ベルフォンドに王族の紋章が入ったマントを渡す
この女は私の教育係という事になっているが実際、私の秘書みたいなものだ

「ファム様、ドレイスタ陛下のお話とは何だったのでしょうか？」

ドレイスタとは、さっきの男だ
ファムとは私の愛称で本名はファムレシア・フォン・レ・デュ・ヴィルヘルムだ

「土地を統べる事になった」

「では」

「あぁ」

土地を統べるとは代々魔族の王族は王の子等に領地を任せ、その能力をみて次の支配者を決めるのだ

「ファム様は何処の土地を任せられる事になったのですか？」

「シルベルだ」

「……は？」

## 愚か者

汚い、それがこのシルベルという街を見た私の感想です
とりあえず汚い
やたらとゴミが道に散乱しており街を歩く者も浮浪者か薄汚れた格好の傭兵紛いの者達ばかり
思わず溜め息をこぼしそうになるのを抑えながら少し前を行く主を見ます
申し遅れましたが私、アリーシア・ベルフォンドと申します
ファム様の下で秘書の様な事をしております

3日前に王都を離れ今は新しくファム様が領主になる事になったシルベルにて屋敷に向かっている途中です
本来なら王都から乗ってきた車で、そのまま屋敷まで行く予定だったのですが屋敷まで徒歩で行くとファム様がおっしゃったので街を散策しながら向かっています

「おい、アリーシア」

「なんでしょうか」

「思っていた以上に女が少ないな」

それはそうでしょうね
シルベルの近くには人族の五大国の一つがあり
その他にも小国がいくつかあります
それ故に小競り合い等も多く

過去には大きな戦闘もありシルベルも甚大な被害を被った事があります
そういった理由で軍人や傭兵が多く女性は娼婦や浮浪者くらいなものです

「あらかじめ聞いていたが……ふむ、とりあえず近くの人族の国でも潰すか」

「も、申し訳ありません。ファム様は今なんとおっしゃったのでしょうか？」

ファム様が、とてつもない事を軽くボソッと呟いたのを聞いて慌てて聞き返す

「だから近くの人族の国でも滅ぼしてもやろうかと。そうすれば此処も少しは落ち着いて女もやって来るだろう？あぁ心配事するな人族の美人は、しっかり回収する」

誰も、そんな事心配していません！
落ち着くのです、私！
今、私にしかファム様を止められる者は居ないのですから

「それは些か早計かと。どの国を滅ぼしても五大国が黙っている筈がありません」

魔族は、その長い寿命ゆえか我慢強く基本的には温厚な種族です
プライドは高い方ですが滅多な事ではこちらから戦争を仕掛ける事もありません

しかし、人族は野蛮で欲深く
いつだって、この国に戦争を仕掛ける、きっかけを今か今かと待っているのですから

「冗談だ」

慌てる私を小馬鹿にしたように鼻で笑っていますが
ファム様が言うと冗談に聞こえないんです

「とりあえずシルベルを綺麗にしろ。私が、これからしばらく住むのだから」

「……了解しました」

「後ここに駐留している軍名簿を」

「こちらに」

鞄の中に入れておいた軍名簿をファム様に手渡す
何やらブツブツ言いながら名簿を捲っていくファム様
その間にシルベルの清掃にかかる費用の計算しながら歩いていると

これから私達が住む屋敷に着きました
屋敷と言うよりも小さなお城みたいですが
王城の様な美しさはありませんが堅牢とも言える建て構えです

ファム様は興味無さそうに城を一瞥した後
何年も住んでたかの様に自然な歩みで城の中に入って行きました
慌てて付いて行くと何の迷いも無く、ある部屋に入り大きな机のある椅子に座りました
城の中も外見と同じく質素なものです

「アリーシア、軍の責任者を私の部屋に呼んでおけ」

「了解しました」

軍に連絡した後、王都から共に来ていた者と城のなかを片付けていると軍責任者である貴族の方が来られたのでファム様の執務室にお連れしました

ファム様の後ろに控えながら軍責任者の方を見ますが軍責任者には似つかわしくない横に大きな方で私と王族であるファム様を不躾な目で見ている様は不快感しか覚えません

「お初にお目にかかります、ファムレシア・フォン・レ・デュ・ヴィルヘルム殿下。シルベル領主就任、誠におめでとうございます。私の名は」

「黙れ、喋るな」

豪華な服が可哀相なくらいはちきれそうになっている男はファム様の言葉が理解出来なかったらしく口をポカンと開けて唖然とされています
この様な方がシルベルの軍責任者とは、その立場もお金で手に入れたのでしょう

「あ、あの私が何か粗相を？」

額の汗をせっせとハンカチで拭きながらオドオドと言葉を返す様にファム様は盛大に溜め息を吐き出し苛立ちを隠すつもりも無い様子

「黙れと言ったのが聞こえなかったか？……何時までも貴様に時間は割いては、いられない」

ファム様は机に置いていた書類を軍責任者の方の足元に放り投げると怪訝な表情を浮かべながらも書類を手に取り内容を確認しました

「そこに載ってる奴等は私が貰う」

あの書類にはファム様が軍名簿から厳選した者が載っているリストです
六割は女性で残りは男性なんですがファム様曰わく…同性愛者の方

だそうです

「は、はぁ、それは構わないのですが、一体何にお使いになられるつもりですか？」

「貴様に教えてやる必要があるか？貴様は、さっさと残りの軍を解体して消え失せろ」

「……？それは王都に行けるという事ですかな？」

「王都？行きたければ勝手に行け。もう用は無い出て行け」

ファム様がそう言っても軍責任者の方はファム様に何かを求めるかの様に動きませんでした
私はだけが2人の噛み合っていない状況を理解し
その後の最悪な展開を想像しながら話の行方を見守りました

「……何だ？」

「い、いえ王都就きになるのなら殿下から推薦状等が貰えるのでは？」

そこでやっとファム様が理解し再び盛大に溜め息を吐き出し部屋の空気が重くなる
責任者の方は気付いてないのかニヤニヤと媚びを売る笑顔を浮かべるばかり

「私の言葉の意味が理解出来なかったようだな。私はシルベルから失せろと言った。その後、貴様が何処に行こうが知った事か」

「……どういう事ですかな？」

「本当に貴様は阿呆だな。所詮、豚が私の言葉を理解するのは無理だという事だな。貴様の様な豚が居ると空気が汚れる。目障りだと言ってる。さっさと失せろ」

「な、なにを莫迦な事を！私は公爵家の嫡男だぞ！王族であろうと、そんな横暴が！！」

責任者の方が顔を赤くしながら喚き散らす
これは拙いです
ファム様の押し殺した様な殺気が

「切り裂け」

「グギャア゛ア゛ア゛」

ファム様が一言そう呟いただけで責任者の方の腕が見えない何かで切り裂かれました
痛さのあまりに這いずり回り
血が飛び散り真新しいカーペットが汚れていきます

「黙れ、豚。貴様が公爵家？くだらん、そんなもの知った事か。私

はファムレシア・フォン・レ・デュ・ヴィルヘルムだ」

「ふ、ふざけるな！！」

そこで引き下がっていれば彼の失ったのは腕とシルベルの軍責任者
という立場だけだったでしょう
しかし、この方は選択を間違えたのです

「内なる断罪」

次の瞬間、軍責任者の方の体の中から大量の剣に突き破れ人だった
モノが床に転がりました
ファム様が振り返り口を開く
笑みを浮かべながら
私は吐き気を我慢しながらファム様の言葉を待つ

「リストの奴等の手配を。後、軍の解体通知もな。ついでに、そこ
のゴミの処理もしておけ。私は少し出掛ける」

「了解しました」

## とある女軍人の転機

今日は厄日だと言っても良いだろう

早朝から叩き起こされ人族の盗賊狩りに駆り出されたと思えば、そこで愛剣を刃こぼれさせてしまって足まで怪我をした

そして鍛冶屋に受け渡した後

私は今、傭兵紛いの輩に襲われている

シルベルの治安が悪いとはいえ、まさか軍服を着ている私を襲うとは

とはいえ、今の私の状態は最悪だ

丸腰で足を怪我し

しかも、今日は体調も最悪だ

女性なら分かってもらえるだろうが

「初めまして、女軍人さんよぉ。ちょいとばかし俺達に付き合ってくれねぇか？」

細い路地に連れ込まれ既に逃げ場は無い

相手は３人

出口を塞ぐように横に並んでいる

格好は、みすぼらしいが腰に剣を差している

何日も風呂に入っていないのだろう

体は汚れ悪臭が鼻をつく

「なぁ知ってるか？女軍人は大概、生娘なんだと」

「そりゃ良いなぁ、ゲャハッハッハ」

下衆共が
気付かれないように辺りを見るが武器になりそうな物はない
……覚悟を決めるしかない
これでも誇りある軍人
簡単にはやられん
こいつらに犯されるくらいなら自害すら迷わん

「あぁん？やろうってのか？」

私の剣呑な雰囲気に気が付いたのか相手は不機嫌そうに顔を歪める

「無駄な抵抗は止めろよ？じゃねぇと犯すだけじゃ終わらねぇぜ？」

真ん中のリーダーらしき男がそう言い終わった瞬間に駆け出し
その男の腹に蹴りを放つ
呻き声を漏らしながら膝を折る男に追撃を加えようとした瞬間、後ろから体を羽交い締めされる

「くっ、離せ！！」

「良い匂いじゃねぇか……兄貴大丈夫か？」

「クソが！！そのまま抑えていろよ！グシャグシャに汚してやる！」

「なかなか楽しい事をしてるな、屑共」

男達の汚らしい手が迫り来る時
ゾクッとするよう声音が細い路地に響いた
圧倒的な何かが男達の背後から近付いくる
男達が慌てて振り返り
私も隙間から新たな乱入者を注視する
誰かが固唾をのむ音が静がに響く

そこには美があった
薄汚い街並みでさえ彼女の美しさを際立てるばかり
少女から大人の女性に移りゆく不安定な妖艶さを彼女は持っていた
服装は黒い軍服の様な動きやすさ重視したものであり
彼女自身の美しさと不釣り合いな格好だと思う
矛盾してる様だが、それでも良く似合っていた
だが、その美しさは私には異様に見えた

「私もその遊びにいれてくれないか？」

それまでボケッと突っ立ていた男達が目を醒ましたかのようにだらしなく顔を歪ませる

「こりゃあ上玉だなぁ。こいつは一生、俺達の奴隷にしよう」

男達は下世話な欲望を目に宿し彼女にジリジリと近付いて行く

「早く逃げて！！」

私は自分が逃げる事も忘れて彼女に向かって叫ぶ
彼女はそれに対して妖艶な笑みを浮かべる

「なんだ貴様らが私と遊ぶのか？私としては貴様らの後ろに居る女と遊びたい所だがな」

「げっへっへ、心配しなくても俺達が、そこの女と一緒に足腰が立たなくなるまで遊んでやるよ」

「そうか…」

男達はそれを諦めと悟ったのか
一斉に彼女に襲いかかる
次に聞こえてくるだろう悲鳴に思わず目を瞑る
だが、その声は一向に聞こえず恐る恐る目を開ける

「え？」

そこにはバラバラになった肉片がそこにはあった

戦場で嗅ぎなれた血の臭いが鼻を刺激する
信じれないが彼女がやったのだろうか

その彼女は道に流れる血を嫌そうによけながら私に近付いてくる
助けてくれた恩人だというのに恐怖で体が震える
彼女が手を伸ばしてくる
殺されると思って再び目を瞑る
だが痛みは無く優しく頭をポンポンと叩かれる感触に目を開く
そこには彼女が悪戯を成功させたかのような年相応な笑みを浮かべていた

「ふむ、とりあえず傷はないな。しかし屑共め、私の物に手を出そうとは無礼極まりないな。あぁいった輩はさっさと掃除するか」

彼女はそう言って背を向け立ち去ろうとする
私は慌てて口を開く

「貴女の名は!?」

「直に分かる、エリカ・ブラウン」

「何故、私の名を?」

その問いに応える事なく彼女はニヤリと笑って大通りへと消えて行った

あの後、慌てて大通りへと彼女の後を追いかけたが彼女の姿を見付ける事は出来なかった

「はぁ」

あまりの事とはいえ礼すら言えなかったとは

「あーこんな所に居た。食堂に行くんなら誘ってくれればいいのに、探したのよ」

「ジーナか…」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

茶色のふわふわした長い髪におっとりとした可愛いらしい顔立ちクリクリとした大きな目を心配そうにこちらを伺いながら正面に座る彼女は私と違って可愛く女の子らしく私より遥かに胸が大きい

……女は胸のデカさではない！

まぁ、とにかく軍に居るのが不思議なくらいだ

彼女とは同時期にシルベルに派遣され同年代の女性という事ですぐに打ち解けた

彼女が軍に所属しているのは、その高い給金の為だ
彼女の家は私と同じ平民の出で大家族だそうだ
最近では稼ぎ頭だった父親が病に倒れ
元々あまり裕福ではなかったらしいのだが父親が倒れ余計に
その生活を少しでも改善させたいという気持ちで軍に入隊したらしい

「何でもないなら良いけど」

「本当に大丈夫だ。それよりどうかしたのか？」

「あ、うん、エリカちゃんは知ってる？」

「ちゃん付けはよせと言ってるだろ。知ってるって何をだ？」

溜め息をつきながらジーナに言うと彼女は、その目をさっきとは違ってキラキラさせながら身を乗り出してくる
まるで自分の自慢な玩具を見せる子供の様だと苦笑する

「シルベルに駐留してる軍は解体されるそうよ」

「へーそうなのか……はっ？」

「だからシルベルの軍は解体。所属している軍人も他の所にとばされるんだって」

「そんな…馬鹿な」

平和になってきたとは言え
それは魔族側がそう思っているだけ
人族なんぞ、いつ攻めてくるか分からん
シルベルは人族に対する抑止力の１つだ
そこに軍が居なくなったと知られれば格好の的だ

「…それは本当なのか？」

「多分、ね。それに今はその話で軍は持ちきりよ」

ジーナに言われて食堂を見渡せば確かに至る所でその話をする集団が居る
さっきの出来事について考えていたせいで全然気付かなかった

「なんでも今度、領主になられたファムレシア様が決められたらしいという話だけど」

「ファムレシア・フォン・レ・デュ・ヴィルヘルム殿下か？」

「えぇ」

ファムレシア殿下の事はシルベルにも色々と噂は届いてる
殆ど表舞台に出てくる事はないが王族の中でも有名だ
賢者以上の頭脳を持ち剣も魔法も一流
魔法に関しては王族始まって以来の天才だとか

しかも見目麗しく
その美しさに美の女神を嫉妬させたとか
他にも冷酷非情で
気に入らなければ赤子ですら笑いながら殺すだとか
男よりも女が好きだという悪い噂も多い

「2人とも此処に居たか」

私達に声をかけてきたのは直属の上司である少尉だ
彼は貴族出身だが平民の私達にも分け隔てなく接してくれる優秀な上司だ
その少尉殿が珍しく疲れた顔を浮かべている

「どうかしたのですか？」

「時間が無いので此処で済ますぞ」

私の疑問には応えず少尉は佇まいを直し手に持っていた書籍に一礼しそれを読み上げる

「エリカ・ブラウン軍曹！」

「はっ！」

「ジーナ・シェトラン軍曹！」

「はい」

名前を呼ばれ慌てて立ち上がり敬礼する
食堂はさっきまであったざわめきが嘘のようにシンっと静かになる

「貴官両名は本日をもってシルベル第三中隊より除隊。その後、本日付けで貴官等はファムレシア・フォン・レ・デュ・ヴィルヘルム殿下の勅命により殿下の指揮下に置かれる。よって今から１０分で準備して表の車に乗れ。貴官等に拒否権は無い、以上」

あまりの内容に2人して唖然とする
少尉は疲れた顔をしながら苦笑を浮かべ返事は？と言い慌てて了解しましたと言うと少尉は小さく頷き辞令の紙を渡し敬礼する
それを受け取り敬礼を返す

「少尉はどうなるのですか？」

「私は王都に配属されるようだ」

「そうなのですか。御武運を期待しております」

「お前らもな、ではな」

少尉は疲れた足取りのまま食堂を出て行き

私達も軍に与えられた部屋に戻り荷造りする
と言っても私は殆ど荷物は無いので、すぐに終わらせ
ジーナの手伝いをする

その後、急いで車に乗り込む
車内は薄暗いが私達と同様に荷物を抱え座っているのが１０人程いる
私達が最後だったようで車が動き出す
車内は驚くほど静かで緊張感に満ちてる

車は程なく目的地に着き
私達は車から降ろされ屋敷というよりも城に近い建物の中に入り玄関ホールで待機させられる

チラッと周りを見る
私達が乗っていた車以外にも何台かあったらしく総勢５０人程が静かに並んでいる
その殆どが女性だ
もしかしたら、あの噂は本当なのかもしれないと思っていたら目の前にある大きな階段から、ゆっくりとした足音が響き思考を中断して顔を上げる

そこには彼女が居た
だが、あの時とは纏うオーラが違う
彼女こそ絶対なる王者だと魔族に流れる血が魂がそう叫ぶ
ファムレシア殿下のお姿を見た者は、きっとこの玄関ホールには居ないだろう

それでも皆が自然と膝を折る

「私に忠誠を誓え」

さほど大きな声ではないのに凜とした声が魂を揺さぶる
そして皆、同時に自らの剣を捧げる

「仰せのままに」

と

## 日々の始まり

今や執務室兼自室なりつつある部屋のソファーで寛ぐ
置いてある紅茶を飲み高級菓子を食べる

大きな机の横には新たに少し小さめの机が置いてありアリーシアが
一心不乱になりながら、その机に向かっている

窓の向こうには青空が広がり
心地良い風と共に、その下で訓練をしている声がかすかに部屋へと
流れてくる

手に持っていたカップを置く

「ふむ、暇だ」

「なら仕事をして下さい！シルベルに着任してから、まだ2ヶ月し
か経っていないんですよ！やる事は大量にあります！！」

額に青筋を立ててるアリーシアを一瞥してから無視する

魔族の寿命は途方も無く永い
魔族に限った事ではないが神族や妖精族の一部の長命種にとって最
大の敵は退屈だ
どうやって時間を潰そうか

「はぁ…なら、またファムレシア騎士団の鍛錬をなさったらどうです？」

ファムレシア騎士団
言うまでもなく、この前作ったばかりの騎士団だ
本当は鮮血騎士団もしくは殺戮集団とかにしようとしたが、あまりにも反対されたので仕方なく、この名前にしてやった

「今は自己鍛錬を言い付けてる」

この2ヶ月、朝から晩まで毎日、鍛錬してやった
一応、才能のある奴を選んだが、まだまだレベルは低い
2ヶ月は基礎体力の向上と各自の欠点を見付けてやり
一人一人、とりあえず私が上だという事を体に染み込むまで叩き潰してやった
私の名前を背負ってる騎士団なのだから最強になってもらわないとな
ちなみに騎士団に男も居るが全員ガチホモなので問題は無い

「……しかし、暇だ」

だが、今すべき事は殆ど無い
物事には時期というものがある
それに備え準備するのは良いが
動く時はその時の周りの状況や自分の状況によって変わる

ゆえに今する事はない
こういう息抜きも大切だ

「ふむ、息抜き」

「ファム様？」

「アリーシア！」

「は、はい」

「私はすべき事が出来た。故にさらばだ」

「はい？」

アリーシアの小言が出る前に一瞬で部屋を出る

途中、会う使用人に命令していく
この屋敷に居る使用人の名前を私は知らない
顔も覚えていない

騎士団の面々やアリーシア等の直属の部下と違って
ここの使用人はアリーシアが選んだ者共だ
正直、私にしたら居ても居なくてもどうでもいい
便利なので置いているが
こいつらは替えのきく捨て駒だ
使用人もいつか私が選んでやる

「あ、ファム様」

使用人という名の使い捨てにあれこれと指示しながら歩いていると
途中でジーナと出会う
眼福だと思いながら揺れる胸を凝視する
ジーナが苦笑するが、これは私の物だ
どうしようと私の勝手だ
ジーナは普段ぽややんとしているが案外こういう奴こそ腹の中で色々考えているもんだ

「どうしたんですか？」

「ジーナ、お前も着いて来い」

「はい、分かりました」

何の疑いも無く楽しそうに頷いて私の後ろを歩く
どこに行くんですか？というジーナの当然の質問に厨房だと言うと小首を傾けながらも、それ以上質問する事は無かったのでそのまま廊下を歩く

目的地の扉を開ける
休憩中だったのだろう
厨房の奴等は扉の音にビクッと体を震わせ怪訝そうな表情でこちらを見る
すぐ私と気付いたのだろう

驚きながらも慌てて平伏する

「料理長は誰だ？」

「私で御座います、姫様」

恭しく声を出したのは、この中でも最年長であろうジジィだ
魔族のどの種族かは判断出来んが見た目が老人という事は、かなりの年月を無駄に生きてきたのだろう

「姫様におかれましては今日は一体どの様な御用件で？もしかして御食事がお口に合いませんでしたか？」

「いや食事は、なかなか気に入ってる。貴様は何の種族だ？」

「それは有り難き御言葉。私は鬼族で御座います、姫様」

「ほぉ、では、ある年齢を越えると角が取れるというのは本当だったのか」

「左様で御座います」

鬼族とは魔族の一種族で東部の山奥に住んでいる
特徴は勿論、額の角だ
ある年齢を越えると角は自然に取れるらしい
鬼族は魔法に関しては得意ではないが魔族の中でも腕力等の身体能

力は、かなり上だ
だが私にとって大事なのは、こやつらの料理が日本食に似ているという事だ
私の好みを知っているアリーシアが配慮したのだろう
まぁ当然だがな

「あのファム様？」
「ん？」

今まで黙って後ろに立っていたジーナが口を開く

「あの、何しに此処へ来たんですか？」
「あぁそうだった、料理長」
「何でしょう？」
「今日、宴をする。さっさと食事と酒の用意を」
「外からのお客様も？」
「いや屋敷内の奴等だけだ」
「了解しました」

「うむ」

料理長の指示で虫けらの如く慌ただしく動き始めたのを満足して厨房を出る

「今日パーティーするんですか？」

厨房を出て嬉しそうに聞いてくるジーナに頷く

「もしかしてファム様の領主就任のお祝いですか？」

「違う、ただの暇潰しだ」

ジーナは一瞬ポカンとしたが次の瞬間には笑い出した
これが私の大事な玩具じゃなかったら殺しているところだ

「よし次は中庭だ」

「中庭？」

「あぁどうやら客人だ」

## 招かざる客人

「……ふぅ」

鍛練で流した汗をタオルで拭いながら鍛練を続ける他の団員から離れ中庭の隅の木陰になっている所に座る

ファムレシア様の所に来てから2ヶ月
此処に来た、あの日
私ことエリカ・ブラウンはファムレシア様に呼ばれ私がファムレシア様が団長でもある騎士団の副団長に任命された
こんな光栄な事は無い
命を救われたばかりか夢まで叶えてもらたのだから

ただ歓喜に震える事が出来たのは、その日だけで
次の日からそんな事を考える暇もないくらい地獄の様な訓練の毎日だった

鎧を着たまま湖を泳がされたり
朝から晩まで食事と少しの休み以外は走らされたり
最終的には足腰が立てなくなるまでファムレシア様にしごかれたりと
今、思い出すだけでも嫌な汗が吹き出る

それでも日に日に強くなっている事を実感出来る毎日は私にとって
充実した毎日だと言える

「…しかし、どうしたものか」

先程も言ったが訓練の後半はファムレシア様との1対1の魔法無しの試合方式の訓練だった

正直に言えば私はファムレシア様と対峙した時
如何にしてファムレシア様に怪我をさせないように戦うかという事ばかり考えていた

相手は王族であり我が主
例え、その方が王族きっての天才と言われる、お方でも
まだ百数十歳
女性というよりも、まだ少女に近い
それにファムレシア様が得意な戦闘方法は魔法
剣に自信がある私にとって手加減すべき相手だ

だが私の慢心した、その心は早々に粉々にされたが

結果だけ言えば私はファムレシア様に一太刀入れるどころか指一本触れる事すら叶わなかった

自らが所属する騎士団の団長が自分より強い事は心強い
しかしファムレシア様は団長である前に我々の主であり
お守りすべき相手

我々、騎士団はファムレシア様の手足であり
時には敵を滅ぼす剣であり
時にはファムレシア様を命を懸けてお守りする盾なのだ

その騎士団が主より弱いとは

「はぁこのまま私はファムレシア騎士団の副団長としてやっていけるのだろうか」

ファムレシア騎士団
そもそも、この国の騎士団は特殊な位置にいる
なぜなら国には既に軍がという武力があるからだ

では騎士団とは何か？
それは王族のみが所有する事が出来る私兵だ
王族1人1人の直属の騎士
世間からすれば憧れのエリート集団だ
私も小さい頃から憧れ夢を見ていた

騎士団には基本的に貴族の実力者しか入れない
しかし稀にだが私達の様に平民が入団する時もある
その時は国から士爵の爵位が貰える
士爵は正確には貴族では無く準貴族だ

私とジーナや他にも何人かが入団する時その爵位を頂いた

そもそも平民をこんなに騎士団に入団させるのは歴代の王族でもファムレシア様くらいなものだ

ファムレシア様からしたら使えるモノは何でも使うのが私の主義らしいが

ちなみに、この国の貴族の爵位は上から公爵・侯爵・伯爵・男爵そして子爵だ

「私が騎士でしかも副団長か。あまり実感が湧かないな。此処に来てからは驚く事ばかりだ……それに心配事も」

さっきとは違った意味で溜め息をつく
相談するなら、やはりアリーシアさんだろうか
私と違い頭も良くファムレシア様と同じ黒髪に眼鏡が良く似合うスレンダーな美人を思い浮かべる

アリーシアさんはファムレシア様に古くから仕えているらしくファムレシア様の事で相談するなら適任だろう

「しかし、どう話を切り出すべきか。まさか貴女もファムレシア様と、そ、その、よよよ夜を共にしていますか？なんて聞ける筈が無い！と、というか、まさかファムレシア様とあんな、あんな、ハ、ハレンチな事を！…しかし、ファムレシア様の女性好きという噂が本当だったとは」

「なんじゃ、お主、顔が赤いが大丈夫か？」

「なっ！？」

顔を上げれば何処から入り込んだのか目の前には真紅のセミロング

に抜群のスタイル
目つきは悪いが、かなりの美人が顔を覗き込んでおり
その隣には透き通るくらい白い肌に綺麗な水色の髪を短く切りそろえた無表情の美人が立っていた

「な、なんだ！？貴様等は！此処がファムレシア・フォン・レ・デュ・ヴィルヘルム殿下の屋敷と知っての狼藉か！！」

「ほぉ何やら恥ずかしい事を言ってた割には威勢が良いのぉ」

「なっ！？だ、黙れ！此処は許可無い者の立ち入りを禁じられている！」

「ふむ、なんじゃ、お前、妾の事を知らんのか？まぁシルベルの地なら顔も知らん者が居てもおかしくは無いかの」

「何を訳の分からない事を」

それにしても、この2人は何処から入って来たんだ？
この屋敷にはファムレシア様自ら強力な結界を張っているので屋敷の者や許可された者以外そうそう容易く入れないはず

「今すぐ立ち去れ。でなければ実力行使に出る」

腰に差していた剣を抜き去る
だが2人は慌てる様子も無く

赤髪の女はニヤニヤと楽しそうに笑い
水色の髪の女は相変わらずの無表情だ
中庭で訓練していた他の団長も何事かと近付いてくる
「副団長、どうしたんですか？」
「どうやら侵入者のようだ」
それを聞いて団員達も警戒の色を強くして剣を抜く
「なにやら楽しくなってきたのぉ。メイア死なぬ程度に遊んでやれ」
「……了解」
「なっ！？」
水色の髪の女に一瞬で間合いを詰められる
次の瞬間には何処からか取り出した短刀で斬りつけられる
考えるよりも反射的に避けるが髪が数本飛んでいった
「副団長！」
「大丈夫だ。お前達は、もう1人の方を警戒しろ。しかし貴様舐めているのか？短刀で私の剣を相手にすると？」

「……大きければ良いというものでもない」

「上等だ」

軽く剣を水色の髪の女の胴に向かって振り払うが身を屈め避けられそのまま素早く懐に入り込まれる
それを何とか蹴りでいなす
女は、それを軽々と避けながら私の足を軽く斬りつける

「浅いな」

「……」

女は無言で先程よりも素早い動きで短刀を動かしてくる

初め均衡しているかと思われた実力も数分後には、かなりの差をつけられる
しかし最近は自信を失う事ばかりだ
ファムレシア様の事にしかり目の前の水色の髪の女も私より実力者だ
悔しく思いながらも女の鋭い突きを何とか避けようとするが避けきれず頬が切れる

「……貴女の太刀筋は中々複雑で良い…ただ、まだまだ大振りが多く雑」

太刀筋の事はファムレシア様の訓練の賜物だった
ファムレシア様に最初に言われたのは太刀筋が単調過ぎて簡単に読めるという事
ファムレシア様の訓練で少しでも成長しているのなら、それは嬉しい事だ

しかし、それを指摘した女は表情一つ汗一つかかずに余裕すら感じられる

「…1対1の戦いで相手を制圧するだけなら、たとえ浅くても何度も斬りつけた方が勝つ」

「くっ！」

女の言う通り私の体には避けきれなかった無数の傷が出来ていた
初めは大した事は無かったが傷口から流れていく血が体力を徐々に奪っていく
戦いが長引けば長引くほど不利になっていく

一瞬、膝に力が入らなくなり大勢を崩す

「しまっ！？」

すかさず目の前に短刀が迫ってくるが思うように体が動かない

「副団長！！」

…私は、こんな所で死ぬのか
まだ何も成し遂げいないのに
ファムレシア様に何も返せていないというのに
思わず頬に涙が流れる

「そこまでだ、メイア。あまり私の可愛い玩具を傷付けてくれるなよ」

そう言って私と女の間に容易く入り2本の指で易々と短刀を受け止めたのは、ファムレシア様だった

ファムレシア様は近付いて私の状態を確かめ治癒魔法をかけて下さる

私は申し訳無くてファムレシア様の顔を見る事が出来ない

「不甲斐ないな」

「ファムレシア様…申し訳ありません。屋敷内に侵入を許すどころか、その侵入者に勝つ事も出来ませんでした」

「泣く程、悔しいのなら強くなれ。私の剣くらいには、なってもらわなくてはな。お前には、それなりに期待しているのだから」

そう言って涙を拭って下さる、ファムレシア様に
私は、はいと小さく頷いた

「久し振りじゃな、ファンファン。少々、遊びすぎたかの」

「マリア、その呼び名は止めろ」

赤い髪の女とファムレシア様が親しげに話しているのを見て私も他の団員も思わず困惑する

「あ、あのファムレシア様のお知り合いですか？」

「あぁマリアだ」

「うむ、マリアじゃ」

いや、マリアじゃって大きな胸を張られても何だか腹が立つだけなんだが

「お二人共、そんな紹介の仕方がありますか」

息を切らしながらアリーシアさんが近付いてくる
その後ろにはジーナも居る

「エリカさん、この方はマリアンヌ・フォン・カーベル公爵です」

「アリーシアも久し振りじゃの」

アリーシアさんの言葉で思わず目を見開く

今、アリーシアさんとも仲良く喋っている、この方は代々王族の補佐役として王家に仕えてきた伝統的な家系で政治的にも軍事的にも大きな影響力を持った家だ

マリアンヌ様と言えばカーベル公爵家現当主で国きっての武人でありながら政治手腕も高いと言われている方で
生きた伝説の1人だ
小さな子供だって知っている

「くっくっくっ、びっくりって顔じゃな」

「し、知らなかったとは言え数々の無礼をお許し下さい！」

慌てて膝を折ると団員達も慌てて膝を折る
何故かジーナだけニコニコと立ったままだが

「よいよい、そんな畏まるな。悪いのは妾の方じゃしな」

「そりよりマリア、今日は一体何の用だ？」

「ん？ちょっと遅いがシルベル就任の祝いじゃ」

「ふむ、なら都合が良い。お前も宴会に参加しろ」

「宴会？」

## 始まりの宴

豪華絢爛
高級食材をふんだんに使った料理
最高級のお酒の数々
最高の腕前の楽団による生演奏
輝くシャンデリが照らすのは、そんな会場
普段はメイド服や軍服に身を包んでいる者達も今日は主から貰った
色とりどりのドレスを身に纏っている

私も今日ばかりは鎧も軍服も脱ぎファムレシア様に頂いた赤いドレスを着ている

背中が丸見えで、とても恥ずかしい

「エリカちゃん」

「ん？……ジ、お！お前！なんて格好してるんだ！？」

「なんて格好って」

ジーナは苦笑を浮かべながら近付いてきて手に持っていたグラスを
差し出してくる
それを受け取りながらジーナの全身を眺める

青を基調としたドレスで胸元が大きく開き
ジーナのたわわな胸が強調され

足には深いスリットが入り、その美脚を晒している
私には無い大人の魅力が漂ってくる

「女は見た目ではないんだからな！！」

「あらあら、エリカちゃんだって綺麗よ」

「ふんっ、そんな慰めなど！！」

グイッと手に持っていた酒を一気に口にする
程よい甘さと酸味が喉を通っていく
少しだけ身体が熱くなるのを感じる

「本当なのに…けどエリカちゃんも無茶したわね。マリア様を追い払おうとするなんて」

「う、仕方ないだろ？私はマリアンヌ様を見た事が無かったんだぞ。あの状況では侵入者と思うのが当然だ」

後でアリーシアさんから聞いた話だがファムレシア様とマリアンヌ様はファムレシア様が産まれた時からの付き合いらしい
何でも今は亡きファムレシア様の母上はマリアンヌ様の妹君で亡くなった後、マリアンヌ様がファムレシア様を気にかけファムレシア様の母親代わりでもあり姉代わりでもあるらしい

そう言われて見れば、あのお二方はどことなく似ている

「しかし、肝心のファムレシア様はまだなのか？」

既に会場には屋敷に居る全ての者が集まって各々、食事や酒、会話を楽しんでいる

だが、その中に主催者の姿は無い

「そろそろ来るんじゃないかしら」

それが合図、という訳ではないだろうが会場の入口の扉が開く

扉が開いた音は、さほど大きかった訳ではないのに会場に居た全ての者が開いた扉を見る

その圧倒的な存在感に目を向ける

普段の軍服の様な服とは違いシックでシンプルな黒いドレス

黒髪も相まって彼女が闇を纏っている様にも見える

その闇の中から金色の瞳が爛々と輝いていた

ファムレシア様が一歩踏み出して行く度に皆が息をするのも忘れて見惚れる

通り過ぎた頃に慌てて膝を折り頭を垂れる

奥の一段高くなっている所にある王座
そう、あれは私達にとって王座だ

「面を上げよ。私は今日この日をもって宣言する」

朗々と静かに語られる言葉に皆が耳を傾ける

「私は、この大陸の…いや、この世界の王への道を進む事を」

「……世界の王」

誰かが小さく呟き
誰かが固唾を飲む
いや、それは私自身がしたのかもしれない

「そう世界の王だ。私の私の為だけの楽園を造る為に私は、この世界の王になる」

それは途方も無い夢だ、幻想だ
何処の独裁者だと鼻で笑えるような絵空事だ

だが、この王は世間話でもするかの様に話ながらも揺るぎない瞳で私達を射抜く

「当面の目標は魔族の国ヴィルヘルムからの独立。勿論、貴様等には馬車馬の如く働いてもらう。貴様等の身体も心も血も魂も生も死も全て私の物だ。私が死ねと言うまで決して死ぬ事は許さん……気に食わんかったら此処から去れ。今なら記憶を奪う事で許してやる」

誰一人として立ち上がる事無く自分達の主を見つめる
ファムレシア様は、それを不思議そうに見つめ愚かな者共めと笑いながら立ち上がる

「杯を」

皆が杯を手に持ち立ち上がる

「私と共に来たいのなら、それこそ死ぬ気でついて来い！楽園の為に！！」

「「我らの世界の王の為に」」

ファムレシア様がニヤリと笑いながら杯を持ち上げ酒を飲み干す
皆が躊躇無く酒を飲み干した
外を見れば真っ赤な月が私達を照らしていた

## 浪漫の追求

「んっ…あっ……」

薄暗い部屋で裸の女と女が重なり合う
ファムレシアは楽しそうにエリカの身体を舌でなぞらえていく
エリカは、うっすらと汗で前髪が額に張り付いている

「ん…ふぅぅ……」

舌の動きに合わせてエリカの唇から甘い息がもれる
ペチャペチャと卑猥な音とエリカの艶やかな声が官能的な雰囲気が高めていく
舌が、ゆっくりと下に動いていく

「ファ、ファムレシア様、そ、そこは…」

「感じているのだろ？」

「んっ…いやっ」

そんな中、静かに扉がノックされる

「アリーシアです」

「入れ」

「ふぇ？」

エリカが、とろけきった顔のまま間の抜けた声をだすが
アリーシアは何も知らず部屋に入って来る
そして、そのまま固まった私の下に居るエリカの顔は羞恥心でみる
みると赤くなっていく

「エリカ、シャワーを浴びてこい」

「…！！……！？」

恥ずかしくて言葉が出ないのかコクコクと何度も頷きながらシーツ
を捲いて足早に去って行く
くっくっく、うい奴だ

「……ファム様、お楽しみ中だったのですね。私は次からエリカに
どのような顔をして会えば」

「まぁ楽しんでいたのには間違えではないが、ただ単にエリカの身
体にある傷口を消していた所だ」

まぁ、わざわざ舌で舐める必要は無いのだが

アリーシアは、それを理解したのか溜め息を吐きながら小さく可哀想にと呟く

「それで何の用だ？」

「先日、ファム様が屋敷の使用人を全員解雇したおかげで屋敷の機能が停止しております。食事は今の所、領民の作った物を届けていただいておりますが屋敷の掃除やファム様のお世話に支障がでております」

「ふむ、その点なら考えている」

「あ、あのファムレシア様」

身体を湯で流してきたであろうエリカが恐る恐る近付いてくる顔が赤いのは何も湯上がりという訳だけではないだろうが

「ふむ、お前も話を聞いておけ。お前にも関係ある話だしな」

「えっと何が何だか」

「お前にはマリアの所に行ってもらう」

「マリアンヌ様の所へ？」

「あぁ、そこにあるメイド学院からメイド隊を連れて来い」

「そう言えば以前そんなの造っていましたね」

私が建てたメイド学院
ヴィルヘルム唯一マリアの所に存在する
私の理想とするメイドを作り上げる為の学院で日々メイド達が技能の向上に勤しんでいる事だろう

「あのわざわざ、そんな学院を建てる必要が？何処かの使用人を雇えば」

「……エリカ」

「は、はい」

「お前は連れて来るついでに1日、私の学院でメイドのなんたるかを体験してこい！メイドとは浪漫だ！！」

「で、ですが」

「エリカ、諦めて下さい。こうなればファム様は、てこでも意見を変えません」

「アリーシア、お前もだからな」

「なっ！……そんなっ」

予想もしていなかったのか目を見開いて口を開こうとするのを視線

で叩き潰すとアリーシアが、ガクッと肩を落とした
さてさて私のメイドは使えるようになっているだろうか

## メイド道

「はぁ……」

馬車の中で思わず溜め息を吐くのも無理は無いでしょう
ファム様に仕えてからどれほど私は幸せを逃しているんでしょうか
現在はファム様に言われたようにマリア様の領地であるカルカッタに向かっている途中です
シルベルとカルカッタは意外と近いので車ではなく馬車で向かっています

一緒に向かっているエリカは出発当初は暗いオーラを出していたんですが今はファム様に渡された本というか教科書を黙々と読んでいます

「メイド道…」

無駄に高価な革張りに金色の文字でデカデカとそのタイトルが書いてあり
しかも１５ｃｍもあるんじゃないかと思うくらいの厚さが
余計に読む気を無くさせますが
どうせ着くまで暇だと思い、ページをめくる

「本当にあの方は仕事もしないで一体何をしているんでしょうか？」

1ページ目にこれまたデカデカと主人第一主義の文字を見ながら思わず、こめかみが痛くなります
というか、これ、もしかしなくてもファム様直筆ですよね
とりあえず、それを見なかった事にしてファム様が此処だけは絶対に読めという部分だけ開き、そのページを読んでみる

一つ、メイドは主人なきところには成立しない
一つ、メイドは容姿のみで成立しているのではない
その内面的素質が合わさって初めて成立する
一つ、メイドは主人に対して仕える事が不可欠である
そのためメイドと主人の間には「服従」という上下関係が存在する事を忘れてはいけない
一つ、メイドは主人に関する常にあらゆる職務の任を負うものである
一つ、メイドは「する」のではない
メイドに「なる」のだ
一つ、メイドを真に支えるのは主人への愛とメイドとしての自身への誇りである

そこまで読んで私は静かに教科書を閉じる

「うん、あの方は天才を通り越して馬鹿なんですね」

なんとなしにエリカの方を見ると彼女も読み終わったのだろう
その体は怒りからかプルプルと小刻みに震えている
分かりますよ、その気持ち

「エリカ、大丈夫ですか？」

「……っ！」

「うん？」

「私は感動した！」

「へ？」

すいません
やっぱり、その気持ち分かりません
狭い馬車の中で拳を握り締めながら立ち上がるエリカを見ながら、
そう心の中で謝る

「私は何と愚かだったのだろう！メイドがこれ程まで深い職業！いや！存在だったとは！！私はやっとファムレシア様のおっしゃっていた意味が分かったぞ！」

「そ、そうですか。とりあえず座った方が」

図ったようなタイミングで馬車が止まり鈍い音と共にエリカが消えた

「大丈夫？」

「……痛い」

「でしょうね」

涙目で額を押さえながら馬車の中で転けているエリカに呆れながら馬車を出る

「これは、また立派な」

目の前にはファム様が住んでいる屋敷にも勝るとも劣らない立派な屋敷が
流石はマリアンヌ・フォン・カーベルと言った所ですか

「おい！貴様ら何の用だ？此処はカーベル家の屋敷だ。用が無いのなら立ち去れ」

槍を持った門番が訝しげな視線をよこしながら声を上げる
馬車で来て用も何も

しかし、ファム様が同行していなくて良かったです
あの方なら今頃この察しの悪い門番を殺してしまっているかもしれません

「我々はアリーシア・ベルフォンドとエリカ・ブラウンです。ファ

ムレシア・フォン・レ・デュ・ヴィルヘルム殿下の命で来ました。マリアンヌ・フォン・カーベル様にお目通りを。こちらは殿下の書状である」

「た、確かにこれは王家の紋章。し、失礼しました！少々お待ちを」

門番はそう言って門の中に入って行く

「しかし、王家の使者と分かった途端あのたいとか」

「致し方ありません」

ガシャンと大きな音と共に門が開く

「よく来たの、２人共」

## メイド作成方法～準備～

マリア様とメイアさんに迎えられるがまま屋敷の中に案内される
屋敷の中も外見同様に立派で所々に上手い具合に配置されている調度品も地味な物が多いが見れば見る程美しく気品に満ちています
私は成金趣味の派手な物よりも、こういった物に好感が持てます

屋敷の床は勿論窓から隅々まで埃１つ落ちてない廊下を歩いていく
今やファム様の屋敷は掃除でさえ満足に出来ませんから早急にメイド隊を連れて帰りたい所です

「あのマリア様」

「ん？なんじゃ？」

前を歩いていたマリア様は不敵な笑顔を浮かべながら振り向く
その笑顔にどうしようも無い不安に駆られるのは私だけだろうか

「……えっと学院は何処に？」

「おぉその事か。ふむ、その窓からも見える森があるじゃろ？」

言われて窓の外を見れば確かに鬱蒼とした森があった
その森は私の視力だけでは図れない程の広さを誇っている

「あの森のちょうど真ん中あたりに学院は建っておる」

「そこにはどうやって行くのですが？」

真ん中あたりと言ってもこの広さです
馬車や車までも少し時間が掛かりそうです
学院があるという事で道が整備されていないという事はないでしょうが徒歩は勘弁して頂きたい所です

「いや、あそこには転送陣で行く」

「あぁ、なる程」

「転送陣？」

それまで興味深そうに森を見ていたエリカが首を傾けながら疑問を口にする
転送陣とはファム様オリジナル魔法の１つなので魔法に疎いエリカが知らないのも無理もないでしょう
ファム様の魔力が流れた魔法陣で遠くにある魔法陣まで移動出来るという魔法
ただ、その時カギである言葉を告げなければ発動はしない
そうエリカに伝えると感心したように頷く

「ま、その前にお主等には着替えを済ましてもらわないかんのじゃ

がな」

「着替えですか？」

「うむ、ちょうど着いたの」

中に入れば仕切りに分けられた場所が2カ所あり
そこで着替えるのでしょう

「そこの中に着替えを用意しておる。着方が分からんかったら遠慮無く言うのじゃぞ」

楽しそうにニヤニヤ笑うマリア様を尻目に仕切りの内側に入れば
そこには黒と白を基調としたエプロンドレスが掛けられおり
その横には可愛らしいレース付きのカチューシャが、ちょこんと置いてありました
しかし意外にも落ち着いた品のあるもので良かったと思いながら服を脱ぐ

「何とか自分で着れそうです」

少し安心しながら袖を通す
エプロンドレスを着替え終わりカチューシャの位置を鏡で確認する

「ま、こんなものでしょう」

仕切りを出るとマリア様がニヤニヤ笑いながら似合ってると言ってくれますが喜んでいいか微妙です

「しかし、エリカはまだかのぉ。エリカよ！まだか？」

「……こ、こんなもの着れるかぁぁぁ！！」

「なんじゃ、そういう事か、メイア」

「……」

メイアさんが無言のまま物凄い速さで仕切りの中に入って行くみ、見えませんでした

「な、なんだ！？メイア殿？な、何故！服を脱がす！？やめ、止めろぉぉぉ」

耳を塞ぎたくなるような悲鳴に呆れる
マリア様はニヤニヤと楽しそうに笑って待っている
本当にファム様とマリア様は良く似ている
変な所で
悲鳴が途切れメイアさんが無表情ながらどことなく満足気な顔を浮かべながら仕切りの中から出てくる
その腕に引かれながら顔を真っ赤にしたエリカが、おずおずと出て

くる

「ほぉ、くっくっくっ良く似合っておるのぉ」

「くっ……これ程の屈辱」

これは確かにマリア様の言う通り良く似合っています
恥ずかしげに顔を赤くしながら俯く姿は普段の凛々しい姿とのギャップというやつですかね

「屈辱…それはまた異な事を言うのぉ」

マリア様がニヤニヤした表情が消え真剣な眼差しでエリカを見詰める
エリカは相変わらず俯いている為、見えていないようですが

「私は軍人であり騎士なのです！！それをこの様な格好！屈辱以外に何が！！」

「確かにお主は軍人であり騎士じゃ……では聞くがお主は戦場に立つ時、普段着で立つのか？」

「立つ訳がありません！」

エリカは羞恥心も忘れムッとした表情を浮かべながら顔を上げる

「では、何を着ている？」

「軍服や甲冑、防具に決まっています」

「うむ、そうじゃろそうじゃろ。それはお主の命と誇りを守る為のものじゃ。そしてそれは礼儀でもある」

「礼儀？」

「戦場に対する命に対する礼儀じゃ。それは覚悟に繋がる。お主が着ているメイド服もまた同じ」

「この服も…」

「そうじゃ、メイドとは主に仕えた、その日から戦場に立つのじゃ。そして、その服は自らのメイドとしての誇りと礼儀であり覚悟なのじゃ！それが屈辱などと言語道断！」

「っ！！」

エリカは雷でも打たれたかのような表情を浮かべながら後退る

……正直、私だけでしょうか

この展開に付いていけないのは

メイアさんに至ってはボーっと外を眺めて我関せずですし

「私は私は！また間違っていたのか！……エリカ・ブラウン、メイドとしての心持ちは、まだ持っておりませんが。メイド服を汚す様

な真似だけは致しません！」

「うむ、よう言うた！」

エリカが凛々しい顔で膝を付きながら宣言する
メイド服ですけど
ちなみにマリア様の近くに居た私には最後にボソッとマリア様が呟いた、ちょろいのぉが聞こえてきたんですが
エリカには言わないでおきましょう

「では、行くとするかの。ちなみに転送陣は、これじゃ」

何事も無かったかの様に部屋の奥に進むと床に描かれた複雑な魔法陣
マリア様に促され魔法陣の上に立つ
４人だとギリギリです

「では、行くぞ……偽りは偽り、真は真、変えられぬ法則。しかし我は時空も法則もねじ曲げる者、転送」

目の前が一瞬真っ白になったと思った瞬間には既に景色が変わり私達はメイド達に囲まれていた

「「「お帰りなさいませ、マリアンヌ様メイア様。ようこそいらっしゃいませ、お客様」」」

数百人のメイド達が同時に整然と頭を下げる様は、なかなか圧倒されます
隣ではエリカが納得気に頷いていますが

メイドの中から私も良く知る人物が1人が前に出てきて綺麗にお辞儀をします
綺麗な銀色の髪がサラサラと零れ落ちながら
頭を上げれば以前と変わらない無表情
メイアさんの天然な無表情と違い自らの意志で作り上げた無表情
整え過ぎた、その顔のせいで無機質な人形の様にも見えますが
その碧色の瞳は知的に此方を見詰めています

「お帰りなさいませ、マリアンヌ様メイア様」

「うむ」

「お久しぶりですね、アリーシア様」

「えぇ本当に」

「初めましてエリカ様。そしてようこそいらっしゃいましたファムレシア学院に。私はメイド長のエミリア・フェスティルです。以後お見知り置きを」

## メイド作成方法～作成～

「では、これから私が学院を案内させていただきます。貴女達は授業に戻りなさい」

エミリアさんが、そう言うと他のメイド達が再び綺麗にお辞儀をして各々去って行く

「では、妾達は仕事に戻るとするかの」

「すいません、お仕事中に」

「良い良い。エミリアよ、後はよろしく頼むぞ」

「はい」

マリア様はヒラヒラと手を振りながら再び転送陣で帰って行く

何処かの誰かさんにも見習って欲しいものです

「では、行きましょう」

「あぁ！」

待ちきれなかったエリカが気合いの入った声で応える

そんな声に驚く事も無くエミリアさんは学院の中へと促す
学院と言っても、その建物はこれまた立派なお屋敷です
エミリアさん曰わく実際働く環境と同じ様にする為とか

「アリーシア様、１つお聞きしたい事があるのですが宜しいでしょうか？」

「はい、何でしょう？」

「姫様はお元気でしょうか？」

「えぇ」

無駄に、という言葉を抑えながら言うとエミリアさんは、そうですかと呟いて再び前を見据えて歩く

横に居たエリカが不思議そうな顔をしていたので簡単に説明する
エミリアさんは私の次にファム様に仕えている人物であり
学院１つ任せている事からファム様の信頼も高い
因みに彼女は妖精族のエルフです
特徴的な尖った耳は長い銀髪で隠れていますが

「では、私の先輩か」

「そうなりますね。しかし、私はファム様にお仕えするメイドでありますので気遣い等無用です。では、そろそろ学院の説明をしましょう」

簡単に纏めると、この学院には総勢２００人の生徒が居り基本的には１０人単位の班で行動している様です
基本的には皆さん一通り仕事はこなせる様ですが班によって得意な仕事が違う様です

「今回、姫様のメイドとして屋敷に向かうのは私も含めた１～１０班の総勢１００人です。班によって特徴が違うと言いますが例えば彼女達」

エミリアさんの前方には廊下で何やら見た事も無い道具を使い掃除をしているメイド達でした
私達が通る時は作業を止め私達が通り過ぎると再び作業を始めました
その様子にメイドの仕事を余り見た事の無いエリカは感嘆しています

「彼女達は６班の清掃が得意な班です。清掃と言いますが、その仕事内容は多岐に渡っております。先程の屋敷の清掃や洗濯も勿論庭園の管理も彼女達の管轄です。その他にも色々と」

エミリアさんが言っていた中庭の庭園を途中を見せて貰いましたが、これまた見事な物でした
色彩鮮やかな花達がお互いを引き立たすかのように咲き誇り一日中此処に居ても飽きないでしょう

「此方は道場で御座います」

中庭の美しい庭園を抜ければ勇ましい声が中から聞こえる道場に着きました
中に入ればメイド達が無手の格闘術で鍛練している所で
肉弾戦が得意ではない私から見ても、その鍛練は苛烈なものです

「道場があるのか。しかも、これは…」

「勿論です。私達メイドは常に主人の傍に控えている者。有事の際は盾となり敵から主人を護らなくてはなりません。彼女達は学院でも最強と言われている5班ですね」

エリカは、その説明を聞いているのか分からない程、集中して見ていました
確かにエミリアさんの言う通り彼女達は、どちらかと言えば防御に重きを入れて鍛練している様です

「では、次に参りましょう」

何時までも、そこから動きそうにないエリカを無理矢理引っ張りながらエミリアさんの後ろに着いて行く

「しかし、無手での訓練とは。剣の鍛練とかは、しないのですか？」

「武具での訓練も一通りしますが私達はあくまでもメイドですので。武具を所持しながら仕事をするという事は、まず有り得ません。基本的に無手や魔法やそこにあるあらゆる物を使って盾となるのです」

なる程とエリカが納得しながら、その訓練法について色々質問を続けている内に良い香りが漂って来ました

「エリカ様その話は、ひとまずこの辺で。次は厨房です」

エリカが、まだ何か言いたそうでしたが厨房に入った瞬間その光景に圧倒されたようです
それは私もですが

そこは戦場と言っても過言ではありません
メイド達が休みなく怒号の様に声が飛び交う

「4班ですね。今日の食事はかなり期待して宜しいかと」

「しかし、凄い光景ですね」

「姫様は美食家ですから半端な物はお出し出来ません。彼女達は古今東西あらゆる食に精通しております。姫様の舌も満足出来る事でしょう」

確かにファム様は、かなり食にこだわっており自分の口に合わない物は一切口にせず
あの方の舌を満足される料理人が居なくなればファム様は餓死を選ばれるでしょう

「では、次は実際に授業を体験してみましょう」

厨房を後にした私達はエミリアさんに連れ行かれた部屋に入れば椅子と机そして黒板
既に椅子には他のメイド達が座っていて私達は空いている席に座ります
それを確認したエミリアさんは黒板の方へ歩いていく
どうやら彼女が教鞭振るうみたいですね

「では、まず授業に入る前に簡単に説明します。まず座学ではメイドの在り方は勿論、医術や礼儀作法、言語、計算、歴史等も学びます」

その授業内容の豊富さに思わず驚きます
貴族が通う学校ですら其処まで勉強しないでしょう
ファム様は意外と考えているのかもしれません

「それでは今日はメイドの在り方について復習しましょう。エリカさん、メイドと主人の関係がどのようなものか分かりますか？」

「ふ、服従であります」

突然当てられ驚きながらも答えたエリカに対してエミリアさんが頷きます
相変わらず無表情ですが雰囲気は少し柔らかくなった気がします
エリカを真面目な生徒と認識したのでしょう

「そうです。どうやら来る前に予習して下さってようですね。服従、それは間違えでありませんが教本には、こんな言葉があります。メイドとは太陽の下で主人に跪き屋敷の下で主人と手を取り合うものであると。忘れては、いけないのがメイドの主人に対する態度は服従であって屈従ではないのです」

隣りでキラキラした瞳を浮かべているエリカでは無いですが、なる程と思います
太陽の下とは大衆の前という事
そこで主人を敬わなければ主人の力量が疑われてしまいますからね

「その他にもメイドは自身の過去について無闇に主人に話すべきではないという文章があります」

「何故ですか？」

手を上げて質問するエリカ
私としては、そのエリカの適応力に呆れます

「その過去の内容によっては主人に余計な気苦労や気遣いを与え両者の間に支障をきたす原因になりかねないからです」

確かにメイドの中なは孤児だったり親に売られたり奴隷だったり悲惨な過去を持った者が多いですからね

その後も講義は続き私はぐったりです

勉強は嫌いではありませんが、こればかりは

エリカもぐったりですが、その瞳の輝きは増す一方です

……あの子は失礼ですが馬鹿なんですね

「それでは最後にメイドを真に支えるのは主人への愛とメイドとしての自身への誇りです。そして、その愛と誇りはメイドとなる人間の中からしか生じえない事を忘れてはいけません」

「「「はい！」」」

はぁ、帰りたいです

他のメイド達同様に返事したエリカを見ながら盛大に溜め息を吐き出します

## 異世界召喚？

さて、と
今日は特にする事が無いな
アリーシアとエリカが連れ帰って来たメイド隊は中々使えるようで
文官の様な役割もやらしているお陰で私は楽だ
何故かアリーシア涙を流しそうになりながら嬉しそうに仕事をしエリカは一段と気合いを入れて鍛錬をしている
まぁ私の為になるのなら問題無い

「ふむ、では早速今日はメイド共の味見と開発でもするか…ん？」

足元に魔法陣が浮かび上がる
咄嗟に回避を試みるも既に魔法陣の魔力が私の身体を縛り付ける
強制的な転送だと！？

「くっ！？」

眩しい光に思わずまばたきをした瞬間には景色が変わっていた
薄暗い部屋
灯りは立てられたいくつかのの蝋燭
薄暗い部屋の中には黒いローブを深く被った者共が私を囲む様に息を潜め私を眺めている
私の立っている場所が部屋の中央らしく足元には、さっき見た忌々しい魔法陣

「おぉ勇者様。いや、これは女神様」

「やかましい」

「ぐっ！？」

いきなりに話し掛けてきた奴を蹴り倒す
既に私の機嫌は最悪だ

アリーシアが居れば今のファムには誰1人近付けないようにしていたであろう

「私のメイド共を調教するという楽しみを邪魔をしよって、殺すぞ？」

「お、お待ち下さい！女神様！！」

さっき蹴り倒したゴミが慌てて私の目の前に跪く
耳障りなしゃがれた声でそのゴミが老人だと分かる
どうやら、このゴミが此処仕切っているようだな
それをチラッと見るとそのまま足をゴミの頭に乗せる

「き、貴様！！」

「止めぬか！！」

周りに居た人間がファムの行動に思わずいきり立つが老人がそれを制する

そのまま襲ってきたら八つ裂きにして殺してやったのに
しかし、我ながらメイドの事で浮かれていたとは言え、こうも簡単に強制的に連れて来られるとは
部屋を見渡し感覚鋭くさせていく

「ん？此処は私が居た世界ではないな？」

「よ、よくぞ、お分かりで。貴女様の言う通り此処は貴女の住んでいた世界ではありません。どうか！どうか私達をお救い下さい！」

「この私が貴様等を救うだと？冗談は顔だけにしろゴミ。私は帰る」

踏んでる足の力を強める
ゴミの顔を床にこすりつける
周りに居る人間の殺気が徐々に上がり始めるが気にせず力を込める

「で、ですが！救っていただけぬなら、この国が！いえ！この世界は滅ぶのです！…それに残念ながら貴女は元の世界には帰れぬのです」

「帰れんだと？私は帰ると言ったら帰る女だ」

「し、しかし、伝承に残されているのは召喚の儀だけで帰し方は載っていないのです」

「貴様等みたいな虫けら共と一緒にするなよ」

下にある魔法陣から私が居た世界の痕跡を辿り無理矢理、世界を繋げる
分かりやすく扉と鍵を創る
これで私にしか使えない
虫けら共は私が創り出した扉に間抜け面を浮かべているが私には関係無い
扉を開ける

「……ファム様？」

扉を開ければアリーシアとエミリアが居た
私の部屋に繋げようと思ったが座標位置が少しズレたか
アーリシアが眼鏡をかけて机で仕事をしていたが突然の私の出現に流石に驚いているようだ
エミリアは無表情だ
つまらん女だ

「ふふん、珍しい表情をしているじゃ……うん？お前何をしている？」

「お待ち下さい！女神様！」

足にしがみつくジジィを思い切り引き剥がそうとするがしつこくしがみついてくる

「何をしている！！この方こそ我等の女神様だ！お前等もお止めし頼まんか！」

「おい、それ以上、私に触っていると殺すぞ」

殺気立つ私に思わず手を離そうとするが慌てて足にしがみつくその間、他の奴等が近付いて私に跪く

「どうか！どうか！お助け下さい！」

このままコイツ等を殺してしまうのは簡単だが…
パッと髪をかきあげる
ふむ、足にすがりつくジジイ、跪く人間共、髪をかきあげる私
流石は私だ、絵になるな

「まぁいい。とりあえず話を聞いてやろう。暇つぶしにはなるだろう」

「あ、ありがとうございます」

「フンッ、まぁそういう事だ、アーリシア。夜までには帰って来る」
「どういう事よく分かりませんが、いってらっしゃいませ」
深々とお辞儀をするアーリシアに満足しながら再び扉の向こうに入り扉を消す
鍵は持っているが変に触られても癪だからな
「で、何故お前が付いてくる？」
「メイドですので」
無表情で言うエミリアに若干イラっとするが別に良いかと放っておく
「では、こちらへどうぞ」
ジジイの先導で暗い部屋から出て階段を上る
私とエミリアの後ろを歩く1人の人間以外は部屋に残るみたいだな
まぁしかし異世界か
搾るだけ搾りとってやろう
女神どころか魔王の如き笑みを浮かべて異世界に胸踊らす

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6227w/

---

魔族のハーレム

2012年1月6日16時23分発行